



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

新年明けましておめでとうございます。新しい年が皆様にとって素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。
 新九郎は今年 18 年目に入ります。地域の皆様に愛されるギャラリーとして、今年も多くのみなさまの展覧会が予定されております。また展示はもとよりデッサン会、美術史講座、映画観賞会等楽しく幅のある運営を目指していきたいと思っております。

本年も宜しくお祈りいたします。

新九郎 1月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
1/8(水)~13(月)	常設展
1/15(水)~20(月) 第二回 ほのかの会水彩画展 出展者 加藤和信、加藤美千代 小林 謙、宍戸忠夫 進藤 武、鈴木敬子 多田杉彦、中村 敬 新見博司、林 克己	 小田原近郊を歩きながらスケッチし、描きあげた作品を肴に楽しみ、味わい吞んでおります。
1/22(水)~27(月) きもちよく生きるための多くのヒト・モノ・コト	《ワークショップ》 ※自然な雰囲気のリース作り(土日のみ) ¥1000 * 土曜は午後より ※Café ミントココア 日曜日のカフェコーナー <作家>佐藤北久山、片瀬快平、野崎慎治郎、TER1626、la foret vert、内田美樹、馬渡祥造、平塚幹夫、佐々木工芸、大原レイコ、天城準、Hizuru、佐藤ひろこ、佐藤かつのり、後藤真弓、イパダガラス他
1/20(金) 新九郎デッサン会	 どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500 円 コスチューム、固定ポーズ

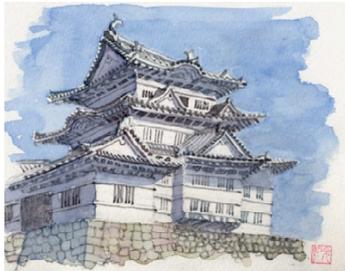
会期・展覧会名	会場
1/9(木)~13(月) 西ゆり会美術展	ツノダ画廊 0465-22-4250
1/16(木)~20(月) 2014 西相美術新春展	アオキ画廊 0465-23-5624
1/8(水)~2/3(月)火曜休廊 新春富岳展	お堀端画廊 0465-23-7819
12/12(木)~1/26(日) ARIO 巡回展	落合館(山北町神尾田) 0463-78-3190
1/9(木)~13(月)スケッチングウォークの会 湯河原グループ展	湯河原町立図書館 0465-63-4155
1/11(土)~26(日) 第1回湘南邸園スケッチ展	清閑亭 0465-22-2834
2/2(日)~2/8(土) 2014 南美新春展	女性センター 大雄山駅前ヴェルミ 3 3FL

お正月の美術館展覧会情報

- 東京国立博物館 1/2 木-1/26 日 03-5777-8600
博物館に初もうで 国宝「松林図屏風」他
- 横浜美術館 12/7 土-2/11 火・祝 045-221-0300
生誕 140 年記念 下村観山展
- 江戸東京博物館 1/2 木-3/2 日 03-3626-9974
開館 20 周年記念特別展 大浮世絵展
- 岡田美術館 1/2 木-3/31 月 箱根 0460-87-3931
日本のシンボル 富士山と旭日
- 国立新美術館 12/14 土-1/26 日 03-5777-8600
Domani・明日展 建築×アート 未来を担う美術家達

東海道五十三次 小田原宿(小田原城)

5 年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行 松野光純



小田原市内の旧東海道は、新宿の交差点で左折し、青物町の交差点を通過し、本町の交差点でまた国道 1 号線と合流する。この合流地点に「なりわい交流館」がある。普段は、このあたりを何気なく歩いているが、東海道をここまで歩いて来て、お茶を頂いて、休息できることは非常に有難かった。多くの旅人に喜ばれているのだろうと思った。

小田原宿は、城下町を兼ねた宿場として大いに栄え、その規模は、神奈川県内の宿では最大で、本陣・脇本陣ともに 4 軒、そして旅籠屋は 95 軒を数えたといわれる。ここからは、板橋見付の交差点まで国道 1 号線に沿って進み、板橋の旧道に入ると、何となく昔の街並みを感じる

思うことなど



横井山 泰

師走に恩師相笠さんに会った。座間にいた頃は近所だったのだが小田原に越してからは久々。沼津で共通の知人宅の茶室の襖絵を制作するために逗留しているところにお邪魔した。穏やかな 70 代だけども芸大ボクシング部の武闘派で、最近も若者に絡まれて殴ってきたから反射的に動いたら相手は流血していて、そのまま交番に引っ張って行ったそう。だ。「画家は対等だ」と師は言うが【心意気】ってことだろう。フランスの話やら師の留学したスペインの話、制作のペース、展覧会、作品。ワインを飲みながら話した。

「休みの日はあるんですか?」「ない! 毎日やってる」「お金を稼ぐための仕事も真剣にやれ」「雑用をさばるな」「年間 80 枚は描け」「小品も観念えするものを」「一芸でなく二芸を持って」「年間 40 本展示してみろ」「テーマは 2 年で変えてるよ」「僕たちは北斎の後継者だ」「ロペスはすごい」「絵だけ描いて生活していくと言って社会経験しない人の作品は大抵つまらんし成功もしていない」「何でもいから僕を越えてごらん」やや落ち込んでいたのですが、蘭室とか薫陶とか善知識とか【よい人と交わり成長する】みたいな言葉を体感します。学生時代「君のカタチはいいけど色がダメ」と言われた意味が最近ようやく観えたような気がしていたけど、もう一度考え直さなくては行けないな。

「一番楽しいことってなんですか?」「歳をとると男性としてみられないのはつまらないけど、教え子が活躍しているのは楽しいよ」

先生、僕頑張ります!!

おだわらミュージアムプロジェクト（OMP）では、これからの美術館のカタチを探るため「地方公立美術館・市民ギャラリー一見学ツアー」を企画実施しています。12月8日（日）第3回目として「川口市立アートギャラリー・アトリア」「さいたま市立うらわ美術館」を見学しました。今回はOMP会員を含め8名の参加者がありました。

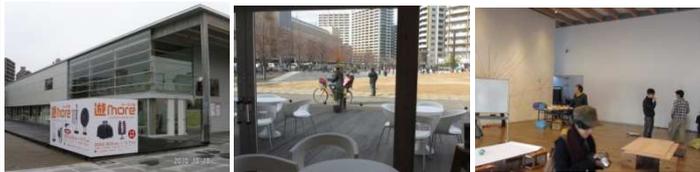
アトリアは小野寺優元芸術監督、うらわ美術館は森田一主幹兼事業係長にご案内していただきました。

アートギャラリー・アトリア

サッポロビール工場跡地再開発でリボンシティが生まれ、この公園内にサッポロビール(株)から建物の寄贈を受け、平成18年アトリアが誕生した。展示室A・B・各77.5㎡スタジオ195㎡の小規模ながら、カフェもあり、広く張り出したウッドデッキと、ガラス張りのホワイエは人とアートがふれあうように設計されている。サッポロビール工場の土台を支えた松杭がギャラリーの床材に利用されている。ものづくりのまち川口の新しい表現の場として成長していくことをめざす。

うらわ美術館

旧浦和市には公立の美術館がなく、地元の作家をはじめ市民のなかから、「市の美術館が欲しい」という声が大きくなってきた。そのような経過があり、旧浦和市役所跡地に造られた「浦和センチュリーシティ」の中に、平成12年うらわ美術館は開館した。「浦和ロイヤルパインズホテル」の豪華なエントランスから、エレベーターで3Fの美術館に直行する。展示室はA・423㎡、B・201㎡、C・45㎡、D・62㎡。コレクションは「地域ゆかりの作品」と文教地区の特性を考慮し「本のアート」が収集されている。



公園内にモダンな建物、目玉となる泰西名画の収蔵品……こうした美術館は、新設も維持管理も難しくなっていました。歳月が経ち、時代が変わり、多くの施設が老朽化しニーズに適合しなくなっています。

再開発の際、市民のかつての生活基盤に担った施設に、精神の発露に触れられる“場”が組み入れられたことは、有意義であり、必然であると考えたいのです。工場という無機質な空間にも、働く人達の営みがあり、湿地に建てられた工場を支え続けた基礎杭を製材して内装材に使った川口アトリア。

無愛想のイメージがある市役所の跡に建てられたビルに、商業都市大宮に対して文教都市浦和に相応しい「本」をテーマにした収蔵方針のうらわ美術館。

地域の特色と歴史を活かした文化の拠点が、少ない予算ながら活動していることは、頼もしいし、羨ましい。 瀬戸 克信

【アトリア】日当たりの良い平屋作りで松の床がいい味を出している。館内は市民参加のワークショップ準備中で活気にあふれていた。市民に開かれたギャラリーとして収蔵品はないが暮らしの中で思い描くアートに出会える美術館として今後も公募展やワークショップが目白押しである。

【うらわ美術館】年間10万人の入場者があり今回も「アートが絵画と出会うとき」を開催されておりギャラリートークを聞くことが出来た。地域ゆかりの作家達を大事にしており(今回も高田誠展開催)国内外の作品を収集している。豊かな作品を継続していく気持ちが伝わる会場でした。 柏木隆一

今回のツアーで印象に残ったことが2点。

まず、川口市「アトリア」、予算の関係から収蔵施設を断念したとのことだが、それを補って余りあるアクティブなギャラリーである。市民ボランティアと一体となり、ワークショップを中心に、市民を本気で呼び込もうという熱気が感じられ、仮設建築のような外観には気持ちよく裏切られた。

また、うらわ美術館は、市役所跡地にホテル等との複合施設として平成12年開館。首都圏の後発美術館として、特色あるコンセプトの打ち出しが集客の鍵だが、「地域ゆかりの作家」という公立美術館の役割としてのコンセプト以外に、「本をめぐるアート」を設定しているところにセンスのよさを感じた。

アートとしての挿絵だけでなく、本自体も作品であり、またその内容との関連性など、さまざまな切り口でビジターを楽しませることができる。今回の企画展「アートが絵本と出会うとき」でも、いきなりのロシア・アバンギャルドという展開に引き付けられてしまったのでした。 野口誠之

両館は事情は異なるが、近年美術施設を新規に開館した。小規模でもアートの場となる施設が必要であり、運営に際しコンセプトと人が大事であることを痛感した。

小野寺芸術監督の「今、求められるのは美術でなくアート。アートは人の精神がテーマであり、美に特化しない多様な表現があり領域が広い。」「アトリアは、アートに出会い、考え、制作し、発表する、様々な体験を通し表現の場として成長していくもの。」との説明にこれからの美術施設のあるべき姿を見る思いがした。企画展に二つの公募展（アート・写真）、多彩なワークショップと活発な活動は市職員2名、5人の学芸員、アーティスト、ボランティアスタッフが支える。

うらわ美術館では、郷土ゆかりの画家の常設展示があった。地方美術館で地域の作家を見ることは楽しみであり、意味がある。小田原の美術を顧みる場がない事は残念である。 木下泰徳

【アトリア】ウッドデッキ、北側ガラス張りのカジュアルな外観。周りは、家族連れでにぎわうショッピングセンターや公園。生活そのものの中に同化した施設は、有名カフェや図書コーナーが併設され、道行く人が自由に中の様子をみることができ、誰もが入りたくなる敷居の無い施設だった。

「多様な価値観を共有する場」という館のコンセプトは、企画展、参加型ワークショップ、実技講座、学校・地域との連携事業など幅広い取り組みがなされ、その企画力と運営力の高さが光っていた。芸術監督の小野寺さんは、美大で教鞭をとる現役の彫刻家。1時間半にわたる熱のこもったお話は「アートの可能性」や「これからの美術館の在り方」の参考となる貴重な内容で、OMP企画で訪問できたことに改めて感謝だった。

人口の約1割が外国人、小学校には44か国からカタカナ名児童がクラスに1割いるという現状。子どもにとって故郷となるこの町でアートのインターナショナルな感性を育てていきたいという子どもたちへの思いは、参加型のワークショップの中で広く生かされていた。アートギャラリーの入場者数としては異例の人口の8～9%年間5万人近い人が訪れているという数字がその成果を物語っていた。「アトリア」の様々な取組は、やがて町の色として人々の中に根付いていくはずだ。湘南新宿ラインで2時間。気軽に足を延ばせる場所ができた。次回は、アトリアのカフェでゆっくりお茶とケーキも楽しんでみたい。 木下和子

「アートギャラリー・アトリア」は、極限までシンプルに徹した美術館であった。人の集まる買物広場に建てられ、ガラス張りで室内の活動が外から見える市民に開放的な建物設計である。収蔵品もない美術館であるが、その活動が充実しているのは、ひとえに小野寺芸術監督の手腕と人脈によるものと言える。美術館とは収蔵品を誇るものではなく、美術を通して人々の日々の暮らしを豊かにする場であると再認識させられた。一方、豪華なホテルの3階にある「うらわ美術館」は、場所の問題を複合施設によって解決しており、都市型の美術館のあり方を示していた。収蔵品である「絵本」の展示をしていたが、絵本の絵とは時代を反映している美術品でもあることを学ぶことができた。美術館とは名画を見るだけではなく、「自分を豊かにし、高める場」であると感じた見学会であった。 深野彰